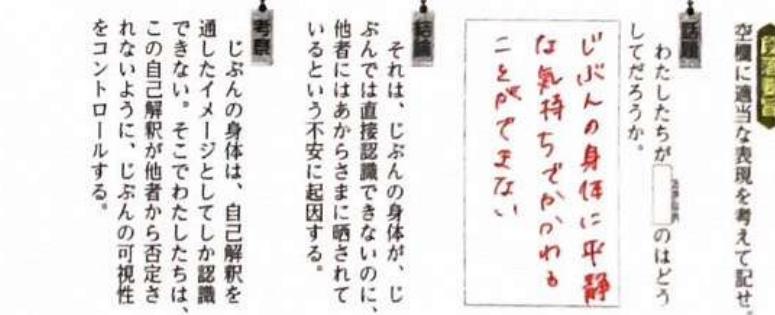


定子好

それなしどうも「わたし」というものがありえないこの身体を、わたしは単純な物体として経験しているわけではない。また他人の身体はときに純然たるオブジェ(客体)として経験されることもあるが、じぶんの身体となると、奇妙なことに、わたしたちはどうも平静な気持ちでそれにかかわることができないようだ。たとえばじぶんの映ったスナップ写真を見るとき、あるいはカセット・テープでじぶんの声を聞くとき、わたしたちはゾクザクに、「ちょっと違う」といった否定的な感情に襲われ、落ち書きをなくす。あるいは鏡のなかのじぶんをのぞきこんでいるときに、その場面を他人にモグゲキされると、何かいけないことをしていたかのように狼狽してしまう。

わたしはじぶんの身体、じぶんの存在の輪郭をじぶんでは直接確認できない。要するに、わたしの身体はいつもなんらかの(解釈)を通してしか所有できないものである。そしてわたしたちがじぶんの身体を意識するときのあの意識のこわばりないしは屈折は、このようにわたしたちがじぶんの存在には直接づけないまま、しかも他者にはあまりにもあからさまに晒されているという、そういうアンバランスからくる不安に起因しているようにおもわれる。

ヘアスタイルや化粧、ひげそりに始まって、ハイヒールやペディキュアにいたるまで、わたしたちの身体の部分でなんの加工も施されていない個所はほとんどない、と言つてもカゴンではないだろう。どうしてわたしたちは毎日Xを替えYを替えじぶんの可視性を演出することにやつきになつていてるのか。そのもつとも大きな理由は、わたしたちの存在の中心に巢食うこうした不安にありそうだ。わたしたちは(解釈)を通じてしか、あるいはひとつの(イメージ)としてしかじぶんの身体的な存在を手に入れることができない。その意味で、わたしたちの存在は自己解釈というものを媒介としてはじめて可能になるといえる。ところがこの自己解釈は往々にして他者によって否認される。ことわたしの可視性に関するかぎり、他者はこのわたし自身よりもはるかに近くにいるわけだから、わたしの自己解釈と他者の証言とが食い違えば、修正しなければならないのは明らかにわたしの解釈のほうである。わたしの存在が解釈によって支えられているかぎり、解釈が破綻すれば、わたしの存在はたちまちぐらつくしかない。そこで両者のあいだに決定的な齟齬が生じないように、わたしはじぶんの可視性(=外見)をじぶんでコントロールしておくる必要がある。不意を襲うような解釈をあらかじめ封じ込めるためである。化粧や着衣の行為はこのように、わたしが「わたし」となるために不可欠な戦略(操作)のひとつである。



自らの身体、自分で直接確認できない 何らかの解釈を通してしP見山はい
てモ： 他者は、自ら自身ナリモ 私へ存在をよく見ゆ
れども

〔他者と自らで意見が食い違へたとき 他者の方へ
信憑性P高い〕

〔私の意見を修正しないはならぬ〕

〔私の意見を修正しないはならぬ〕

〔私の存在は自己解釈ででまつて〕

〔私の存在は自己解釈ででまつて〕

〔私の存在は自己解釈ででまつて〕

〔他の者との食い違へを避けるため 自己をコントロール(ヒビ難い)とする。〕

定于女

余は好意の干渉した社会に存在する自分を甚だぎこちなく感じた。人が自分に對して相応の義務を尽くす何でもない。従つて義務の結果に沿する自分は、ありがたいと思ひながらも、ガングニヤの念を起こしにくい。それが好意となると、相手の所作が「一挙一動悉く自分を目的にして働いてるので、活物の自分にそい。悉く「自我の主張」を根本義にしている。それほど世の中は切り詰められたのである。

こうは解釈するようなものの、イゼンとして余は常に好意の干渉した社会に存在する自分をぎこちなく感じた。自分が人に向かつてぎこちなく振る舞いつつあるにもかかわらず、自らをぎこちなく感じた。そして病に罹った。そうして病の重い間、このぎこちなさを何處へか忘了。

看護婦は粥を調味噌と混ぜ合わせて、一匙ずつ自分の口に運んでくれた。余は雀の子か雀の子のような心持ちがした。医師は病の遠ざかるに連れて、殆ど五日目位ごとに、余のために食事の献立表を作つた。ある時は三通りも四通りも作つて、一番病人に好さそうなものを選んで、あとはそれなり反故にした。医師は職業である。看護婦も職業である。礼も取れば、報酬も受けれる。ただで世話をしていない事は勿論である。彼らを以て、單に金錢を得るが故に、その義務に忠実なるのみと解釈すれば、まことに器械的である。実も蓋もない話である。けれども彼らの義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かして見たら、彼らの所作がどれほど尊くなるか分からぬ。病人は彼らのもたらす一点の好意によつて、急に生きて来るからである。余は當時そう解釈して独りで嬉しかつた。

子供と遊ぶて大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文から出来たように見弱める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣に吸収する場合が極めて少ない。本当に嬉しかつた、本当にありがたかった、本当に尊かつた、生涯に何度も思えるか、ガングニヤすればいいほんでもない。たゞい純潔でなくてても、自分に活力を添えた當時の感情を、余はそのまま長く余の心臓の真中に保存したいと願つてゐる。そしてこの感情が遠からず単に一片の記憶と変化してしまいそうなのを切に恐れています。——好意の干渉した社会に存在する自分を甚だぎこちなく感するからである。

空欄に適當な表現を考えて記せ。

l 7 賀沢 业義務と云ふまともに果たせていないのに、好意を求める。——

傍緒 1 [二三] に解釈するようなもの

↓ 今の青年が自我の主張(はるかに) して (いそ) う ↑

切りのめうれで、
せき意の干乾びに社会・器物的な世が原因。

卷之三

看護婦や医師の世話を
義弟ではなく
好意で解釈して

「アホは尊い奴だ、」
「アホに生きてくら、」
「アホだ、」

余はてせ意はとてつもなきありにいもの

(好意の干がらばに社会に存在して自分より二つは無い。)

単に一片の記憶と見る」とおっしゃる。

頑
7
11
3

定義

1 日本的思考は、しばしば、模倣をこととする「**雜居性**」を特徴とするといわれる。それは、かつては中国を模倣し、近代では西欧を模倣したといわれる。それがひどくいけないことのようにいわれるのは、□による。模倣は簡単なことではない。改作なしの模倣などどこにもない。反復はかならず差異化である。差異と反復が模倣の本質である。そうなると、模倣と独創との差異の境界はきわめて小さくなる。西欧諸国の文化は、ギリシアとローマの差異化的模倣である。日本の場合にも同様に、中国と西欧の差異化的反復である。差異には、何らかのオリジナルな改作的工夫が必要である。

日本では、**〔二〕** 儒教を儒学に変換し、宗教性をできるかぎり拭して、操作可能な「知識」へと改作する。これは日本におけるひとつの独自な特徴である。キリスト教であれ何であれ、宗教性がなくなるわけではないが、宗教性は、他国にくらべて限りなく小さくなる。日本では、宗教的イズムが、宗教戦争なしに共存できるが、それは諸宗教がいつのまにか操作可能な、道具性の知識に転換しているからである。またそのゆえに、日本では、ある宗教イズムから他のものに容易に転向できるのである。転向は道德的にいかがわしいと感する意識は、純粹主義のイデオロギーのなせるわざであり、日本人は古来つねに転向をやり続けてきたのである。古代における中国文化の導入はひとつの転向であつたし、そして近代における西欧との出会いは、中国文化から西欧文化への転向を劇的に実現した。すべてを道具的な操作可能な実用知に変換すること、これが日本の文化の雜居性を生みだす原因、いやむしろ精神の鎧型である。

しかし雜居は、そのままでは雜居性にいたりはしない。たしかに雜居を許す文化は、雜居を許さない純粹主義文化よりも、雜居性を生む可能性は高い。**〔三〕** それはあくまで環境なし条件ではあっても、自動的に雜居を生むわけではない。われわれは、雜居環境を存分にいかして、雜居文化という本来の文化のありかたにいたる道を構想しなくてはならない。

雜居は他者の文化を変換する装置が作動した結果をさす用語であり、雜居は精神の創造力に関わる用語である。雜居性は雜居の精神なしにも可能であり、雜居はかならずしも雜居の精神に通ずるものではない。雜居の精神がないままに、他者の文化との出会いを喜び、それを実用知に変換するだけでは、雜居的流行しか生まれないであろう。日本人がタインやっているのはまさにこれだ。日本人は一般に、雜居性のなかに雜居性を溶解し、雜居の精神を自覺的にバイヨウすることを無視してきたと思われる。なぜなら、かづまず純粹なるものがいかに空虚であるかを自覺してからなくてはならないだろう。

日本文化と雜居性を特徴とする

〔一〕 純粹主義のイデオロギーにより、ひどくいけない

〔二〕 模倣をする

このように扱われてきた

〔三〕 模倣の本質は、差異と反復であり、オリジナルな改作的工夫

が大切で簡単なことではない

雜居性の原因は、→道具的な操作可能な実用知に変換してきてから。

すべても

雜居性(≠雜居性)、精神の創造力に因る本来の文化の性質

雜居はそのままでは**〔雜居〕**と生まない

↓**〔雜居文化〕**という本来の文化のあり方にいたる道

↑

また、純粹な文化・精神は存在したことがない

(現在までの日本人は雜居の精神を自覺的に培養することを避けてしまつた)

↓純粹なるものは**〔空虚〕**だ。

空欄に適当な表現を考えて記せ。

日本の文化は、中国文化や西欧文化を操作可能な実用知に変換することで文化的な雜居性を確立した。

差異と反復にあり

日本の文化は、模倣による雜居性を特徴とするが、模倣の本質は

日本の文化は、中國文化や西欧文化を操作可能な実用知に変換することで文化的な雜居性を確立した。

日本の文化は、中國文化や西欧文化を操作可能な実用知に変換することで文化的な雜居性を確立した。